KYOTO MEDICAL ASSOCIATION
BeWell
医師会からの健康だより
■発行／京都府医師会
これだけは知っておきたい
健康の知識
VOL.46

成人麻疹

小児より症状が悪化する成人麻疹。「ワクチン接種」は今後の流行を阻止する要。

KYOTO MEDICAL ASSOCIATION
BeWell
医師会からの健康だより
■発行／京都府医師会
これだけは知っておきたい
健康の知識
VOL.46

麻疹流行の影に、成人麻疹の増加が目立ってきています。
成人麻疹は、一般的な小児期の麻疹よりも症状が悪化し、重症化しやすい感染症です。
今回の『BeWell』は、成人麻疹に対する注意と今後の対策について紹介します。

2007年に流行した成人麻疹とその背景

2007年の麻疹の流行は、2001年に次ぐ患者報告数となっています。その特徴は、15才以上の成人麻疹が殆んどだったことです。1978年に麻疹ワクチンが定期の予防接種となりましたが、1978年の1才児は2007年に30才を迎えており、現在の30才以下はその多くが麻疹ワクチンを1回接種し、麻疹に罹患した経験がない人達と考えられます。この世代には、麻疹ワクチンを接種しなくて麻疹に罹患していない人が一部残っており、麻疹ワクチンを接種したものの免疫がつかなかった人（約5%未満）や、ワクチン接種後長時間が経過し、その間に麻疹ウイルスの曝露がなかった（麻疹患者と接触していない）ために、麻疹に対する免疫増強効果（ブースター効果）が働かず、麻疹に対する免疫が低下してしまったなどが、現在の成人麻疹を発症しているものと推測されます。**2007年の流行では、麻疹にかかった人達の多い順の年令は、20代前半（20～24才）、次いで20才後半（25～29才）、15才後半（15～19才）の順となり、15～29才までで全報告数の80%前後を占め、34才までで90%以上となっています。**20代前半が最も多かったのは、1989年～1993年4月までMMRワクチン（麻疹、風疹、おたふくかぜの3種混合ワクチン）が実施されたのが、その背景にあるのではと云う意見もあります。

ワクチン接種と情報の充実で成人麻疹の流行を阻止しましょう。

成人麻疹の今後の対策

成人麻疹の流行を阻止するには、次の3つの点が大切です。

1. **麻疹に対する高い免疫力を維持すること。**
（ワクチンの2回接種の実施）
2. **ワクチンの接種率を高めること。**
（95%以上）
3. **サーベイランスの充実。**
（麻疹と診断したら、直ちに保健所に届け、どこで流行しているか等の情報を早期に中央で把握すること）

麻疹ワクチン接種が流行を阻止するキーワード

その為に、2006年6月2日より第1期（生後12ヵ月～24ヵ月）のMRワクチン（麻疹風疹2種混合ワクチン）の接種に加え、小学校就学前の1年間（幼稚園の年長児）に第2期としてMRワクチンを接種することが決まり、現在実施されています。さらに、中学1年生と高校3年生にMRワクチンを接種されることが決まり、2008年4月より5年間実施されることが予定されています。
麻疹ワクチンを受けることが何よりも大切です。

■MRワクチン接種スケジュール

	出生	6ケ月	12ケ月	2才	5才	6才	7才	12才	13才	14才	17才	18才	19才	20才
麻疹風疹（MR）ワクチン			1回		1回			1回			1回			
			第Ⅰ期（1才児）		第Ⅱ期 ※1（小学校就学前）			H20.4月～※2（中学1年生）			H20.4月～※2（高校3年生）			

※1 2006年から小学校就学前の1年間（就学前年度4／1～3／31）にMRを第Ⅱ期として接種する事が決まり実施中
※2 2008年4月からは中学1年生と高校3年生にMRワクチンを5年間1回追加接種される予定

京都府医師会
〒604-8585 京都市中京区御前通松原下ル TEL:075-312-3671（代表）
<ホームページ>http://www.kyoto.med.or.jp <E-mail>kma26@kyoto.med.or.jp
●発行 WINTER 2007●

小児期のワクチン未接種の方や、麻疹に罹患されていない方は、特に気をつけましょう!!

注意! 麻疹は、感染する年齢が遅い程、危険度も増していきます。

■成人麻疹の流れ

10～12日間の潜伏期間

感染力がすごく強く、呼吸器より体内に入る。

カゼのような諸症状

小児
2～4日間のカゼの様な諸症状

成人
小児よりも症状がひどく、しかも長引き重症感が強い

コプリック斑

小児
口の中の頬の裏側に拡がる

成人
食道から、胃粘膜にかけて拡がり、長時間持続。合併症も起こりやすく肺炎、脳炎、急性散在性脳背髄炎などで死亡するケースも高い。妊婦の場合は流産や早産を起こしやすくなる。

発　疹

小児
3～4日ぐらいで回復に向かう。

成人麻疹の症状と合併症

強力な感染力を持つ麻疹ウイルス

成人麻疹について説明する前に、一般的な小児の麻疹について述べておきましょう。麻疹ウイルスは、患者さんと接するか、患者さんが通り過ぎただけでも感染するほどの感染力の強いウイルスです。ウイルスが呼吸器より入り10～12日間の潜伏期の後に発症します。はじめは感冒称症状（38度前後の発熱、鼻汁、くしゃみ、咳、目やに、眼球の充血等）が2～4日続き、次第に症状が強くなります。次に、いったん解熱傾向があり次いで高熱と同時に発疹がでてきます。

小児麻疹の場合は1週間ぐらいで治ります。

発疹が認められる1～2日前頃に、口のなかの頬の裏側にコプリック斑と呼ばれる白色の小さな斑点が出現するのが、麻疹の重要な特徴ですが全部の患者さんに認められることは限りません。この頃より粘膜症状（目やに、鼻汁、くしゃみ、眼球充血、咳等）がピークに達し、発疹も次第に増強し、全身に拡がります。発疹出現後3～4日には解熱傾向に入り、発疹は赤色より次第にあづき色に黒ずんで色素沈着を残して回復します。合併症のないかぎり、全経過はほぼ7～10日で回復しますが体力が回復するには約1ヵ月を要することがあります。中耳炎、肺炎の合併の頻度は高く、時には脳炎や急性散在性脳背髄炎（ADEM）という重篤な神経症状を伴う合併症をおこします。

女性は特に注意が必要な成人麻疹。

成人麻疹の場合、初感染では小児の麻疹より重症感が強く、発熱から発疹出現までが長く、コプリック斑が口腔粘膜から食道や胃粘膜にまで拡がり、長時間持続することもあります。成人麻疹での重症、合併症で入院を要する人達は、殆んどがワクチン未接種で、小児期に麻疹に罹患していない人です。合併症も肺炎、脳炎、急性散在性脳背髄炎等で死亡するケースも少なくありません。成人麻疹の増加にともない、周産期女性の罹患例も増加し、妊娠中では重症化しやすく、肺炎の合併頻度も高く、流早産をおこしやすく、特に発疹出現後2週間以内に高率に発生します。

軽症でも他人への感染には十分注意。

一方、ワクチン接種していて長時間の間に免疫低下して罹患した（修飾麻疹という）成人麻疹では、症状が典型的でなく軽症で、発疹の出現範囲も局所的なことが多く、内科では麻疹の診断に至らず、他の発疹性疾患と診断されることが少なくありません。この修飾麻疹は軽症ですが、他の小児や成人に感染力をもっているので注意が必要です。